

三条せと物や町出土の『桃山茶陶』

令和 8 年 5 月 2 3 日

京都市文化財保護課 西森正晃

1. はじめに

日本人とお茶

平安時代初頭に喫茶の記録（『日本後紀』弘仁 6 年（815）4 月 22 日条）※当時は団茶（餅茶）

平安宮「茶園」（808 年以降）の存在（内蔵寮殿の所管）⇒当時は養生薬としての認識

『延喜式』巻 23 尾張・長門国からの貢納品に「茶椀」径 5 寸（約 15 cm）⇒緑釉陶器碗

点茶（抹茶）の到来

中国では宋代に点茶法（抹茶）が成立 ⇒留学僧によって日本にも到来（栄西『喫茶養生記』）

喫茶は禅宗寺院における生活規範の一つ ⇒建仁寺四頭茶礼（臨川寺境内から多量の天目茶碗出土）

⇒14 世紀以降、瀬戸窯で茶入・天目茶碗の生産開始

喫茶の広がり

禅宗に帰依する武家層への広がり

社寺門前の一服一銭の茶（参詣曼荼羅）⇒龍泉窯青磁碗

武家の茶

足利将軍家によって喫茶は武家儀礼の一つとしての位置づけ

「東山御物」『君台観左右帳記』足利将軍家の歴代コレクション＝唐物（中国産）偏重

茶の湯の流行

村田珠光（1422 カ-1502）、武野紹鷗（1502-1555）、千利休（1522-1591）

⇒町衆による侘茶の成立（和物（国産）茶器への評価）

茶の湯と政治の結びつき

織田信長による「御茶湯御政道」＝茶の湯と茶道具に大きな価値が付与されることに

⇒名物茶器の収集、茶会の許可制

秀吉のブレーンとしての千利休…茶の湯は権威を示すものとして必須

⇒「内々の儀は宗易に」（『大友家文書録』）

「宗易ならでは関白様へ一言も申上ぐる人これ無しと見及び申候」（『宗湛日記』）

茶道具の価値観の変化（侘茶の大成）

「宗易形ノ茶ワン」（『松屋会記』）…利休好みの筒型茶碗 →和物茶陶（楽茶碗、瀬戸黒茶碗）の成立

⇒宗匠として圧倒的な権威を持った利休の価値観と評価 ⇒**新たな流行を生み出す源**

古田織部（1543 カ-1615）の登場

利休切腹後の茶の湯宗匠。町衆の茶の湯（侘茶）から武家相応の茶の湯へ

2 代将軍徳川秀忠の「茶の湯指南役」⇒「天下一」の称号（『看羊録』）

⇒将軍家、大名、朝廷、社寺、商人、町衆、職人との深い繋がり ⇒**織部の強い影響力**

⇒「ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケモノ也」（『宗湛日記』）…**新たな価値観の成立**

⇒**豊富な器種構成と強い個性を持った「桃山茶陶」の誕生**

2. 三条せと物や町の成立

豊臣秀吉の京都大改造（天正 18 年（1590）～）

天正地割・御所修築・寺町及び寺之内形成・御土居築造→街路の新設、洛中地子銭免除

⇒人口激増、市街地拡大 …経済力の向上、大量のモノの流入 ⇒**大消費地京都の成立**

御土居築造による四条口の封鎖、三条大橋架橋 …三条口が東国との玄関口

寺町との接点 …三条通に面する誓願寺は女人往生の寺として多くの参拝者が帰依

慶長 16 年（1611）角倉了以による高瀬川開削と舟入築造 …水運による西国との結びつき強化

⇒**三条通は陸運と水運の結節点＝洛中一の目抜き通りに変貌**

「洛中洛外図屏風」（富山・勝興寺本）：慶長（1596-1615）末年頃

⇒三条寺町西入に 2 軒のやきもの屋（現在の弁慶石町あたり）

『京都図屏風』「せと物や町」（現：中之町）：元和 6・7 年（1620・1621）又は寛永元年（1624）頃

『都記』「せと物や町」（現：中之町）：寛永元年～3 年（1624～1626）（**図 1**）

…当時、京都では「せともの」とは施釉陶器を指す

⇒**やきものを扱う商店が存在していたことを示唆**

発掘調査による大量の「桃山茶陶」の発見

弁慶石町 1・2（（1）昭和 62 年・（2）令和 3 年）・中之町（平成元年）・下白山町（平成 7 年）・

福長町（平成 18 年）・油屋町（平成 12 年）⇒**使用痕跡がほとんど無く、廃棄された状態で出土**

⇒**複数のやきもの商店が実在することが明らかに**

3. せと物や町（**図 2**）

弁慶石町 1

・出土状況（**図 3**）

町家裏庭の 3 基の大型土坑から出土。相互に接合する破片が多く、同時期の一括廃棄

完形品が一定量出土。産地の窯道具無し →窯場での選別を経て、商品として持ち込んだもの

・内 容（**図 4**）

信楽、備前産の焼締陶器の割合が高い→信楽産の水指 30 点以上、備前産の豊富な器種

美濃産の瀬戸黒、黄瀬戸、志野、鉄釉、灰釉→茶碗少量

京都産軟質施釉陶器の素地、匣鉢…調査地周辺にて生産していた可能性あり…織部風向付の存在

・特 徴

押圧やヘラによる変化が認められるものの、**作為の度合いは低い**

・年 代

慶長 19 年（1614）開窯の高取内ヶ磯窯産、織部製品無し⇒**慶長年間（1596-1615）後半**

弁慶石町 2

・出土状況（**図 6**）

三条通に近い整地層と考えられる落込みから出土。

・内 容（**図 5**）

落込みから瀬戸黒茶碗 6 点、信楽水指蓋 17 点が出土。蓋は完形品のみ（**図 7**）

- 土師器皿とともに美濃長石釉鉄絵丸皿、志野皿・向付、鼠志野向付、黄瀬戸小杯が出土
- ・特 徴
水指蓋の大半にヘラ記号「十八」「V」
- ・年 代
慶長 19 年（1614）開窯の高取内ヶ磯窯産、織部製品無し⇒慶長年間（1596-1615）後半

中之町

- ・出土状況（図 9）
町家裏手の土坑、地下室、井戸等から出土
完形品が少なく、窯道具が付着したままのものを含む（図 10）。向付は 5 客揃うものが少ない
→窯買いしたものを当地で選別、廃棄したもの
- ・内 容（図 8）
美濃産の施釉陶器が 8 割強
多彩な織部製品
（織部黒、青織部、鳴海織部、赤織部、黒織部、総織部、志野織部）、美濃伊賀、美濃唐津
→土岐・元屋敷窯産の製品が主体
豊富な種類の軟質施釉陶器
- ・特 徴
唐津・高取産を含め、茶碗、向付に特化 →元屋敷窯跡の器種構成に類似…窯買いの証拠
- ・年 代
高取内ヶ磯窯産や豊富な織部製品からほぼ元和年間（1615-1624）

下白山町

- ・出土状況
町家裏手の複数の土坑から出土。完形に復元できるものあり。→商品を当地で廃棄したもの
- ・内 容（図 11）
信楽や備前産の焼締陶器と唐津・高取産の施釉陶器が半数ずつ。美濃産少量。
多様な造形を示す花入、水指、建水等の袋物が豊富 →茶碗、向付少量
- ・特 徴
過度の歪み、透かしや挿座、脚付きなどの作為を強調（図 12・13）
- ・年 代
「天啓年製」（1621-1624）の輸入赤絵皿、高取内ヶ磯窯産の製品からほぼ元和年間（1615-1624）

福長町

- ・出土状況
町家裏手の 2 基の土坑。茶陶とともに、多量の木製品や金属製品、植物遺体等が含まれる
→塵芥廃棄土坑（ゴミ捨て穴）に捨てられたもの

- ・内 容（図 14）
美濃、唐津、高取産の施釉陶器が大半を占める
向付、茶碗の種類が豊富
- ・特 徴
焼成状況及び釉薬の発色良好、高品質＝優品が多い
青織部の陶印、南蛮人形頭部、天目台、煉り込み志野など特徴的な製品を含む＝発注品か
- ・年 代
高取内ヶ磯窯産の製品の出土から元和年間（1615-1624）

油屋町

- ・出土状況
町家裏手の 3 基の土坑 →廃棄されたもの
- ・内 容
美濃産の製品が 7 割を占めるが、唐津鉄絵製品も豊富
豊富な丸碗、皿類の存在
- ・特 徴
茶碗や向付の類は少なく、食膳具（日常雑器）が主体
- ・年 代
高取内ヶ磯窯産の製品の出土から元和年間（1615-1624）

4. 三条せと物や町出土品からみえるもの

古田織部とせと物や町の繋がり

「茶の湯宗匠」、「茶の湯指南役」として活躍した時期とせと物や町の発展時期が重なる

慶長 8 年（1603）鍋島勝茂書状…古田織部の茶会にて「三条之今やき候者共」の動き

茶の湯の権威である織部のお墨付き⇒せと物や町の商人が織部の意図を汲んで活動

織部好みとは

織部京屋敷出土品…唐津焼が大半。美濃産、特に織部焼は少量。歪みの程度は低い

「ウス茶ノ時ハ、セト茶碗、ヒツミ候也、ヘウケモノ也」（『宗湛日記』）＝織部焼×⇒瀬戸黒茶碗か

弁慶石町 1・2 出土品（慶長年間後半）→ヘラや軽い押圧程度。作為の度合いは低い

⇒織部好みの実態を示すのではないか

織部焼の大流行

中之町・下白山町・福長町出土品（元和年間（1615-1624）に廃棄）→慶長二十年（1615）織部切腹

弁慶石町出土品からの変化

⇒型打ち製品の増加による多様な造形、ヘラ目、押圧の強調、挿座や透かしなどの装飾多用

織部焼の急増→織部没後、小堀遠州が筆頭茶頭となる寛永（1624-1645）に至るまでの元和年間

→作為を強調した造形・意匠が産地を越えて発生

⇒織部存命中に織部のお墨付きを得ていた三条せと物や町の商人の手によって産み出された流行か

競合する商店 (図 15)

- 弁慶石町1…焼締陶器 (備前・信楽) の水指・建水
- 弁慶石町2…瀬戸黒茶碗、信楽水指蓋
- 中之町……織部焼の茶碗・向付
- 下白山町…産地別の水指、個性的な建水、花入
- 福長町……高品質の高取焼、織部焼、特注品
- 油屋町……碗・皿の食器類

⇒店毎の産地との繋がり、品揃えの違い

大流行による生産体制の強化

茶陶の付加価値の高さと大流行によって、各産地は生産体制を強化＝茶の湯の裾野が拡大

⇒需要の増加による窯の大型化に伴う量産化

三条せと物や町から出土しない茶陶の存在

同時期の「桃山茶陶」の産地では上野焼、薩摩焼、伊賀焼、萩焼は未確認

⇒せと物や町の商人が主体となる流通経路とは異なる経路の存在

上野焼の京都市内の出土例は僅か5点。内2点は「京の三長者」茶屋四郎次郎邸という点が重要

→細川家から將軍家との結びつきが強い茶屋家への贈答品の可能性

高取焼についても、茶入は出土せず →希少価値 →黒田家の統制

⇒贈答品として大名による厳しい品質管理と統制 ⇒大名家の戦略



図1 「都記」にみえる「せと物や町」(京都大学附属図書館蔵に一部改変)

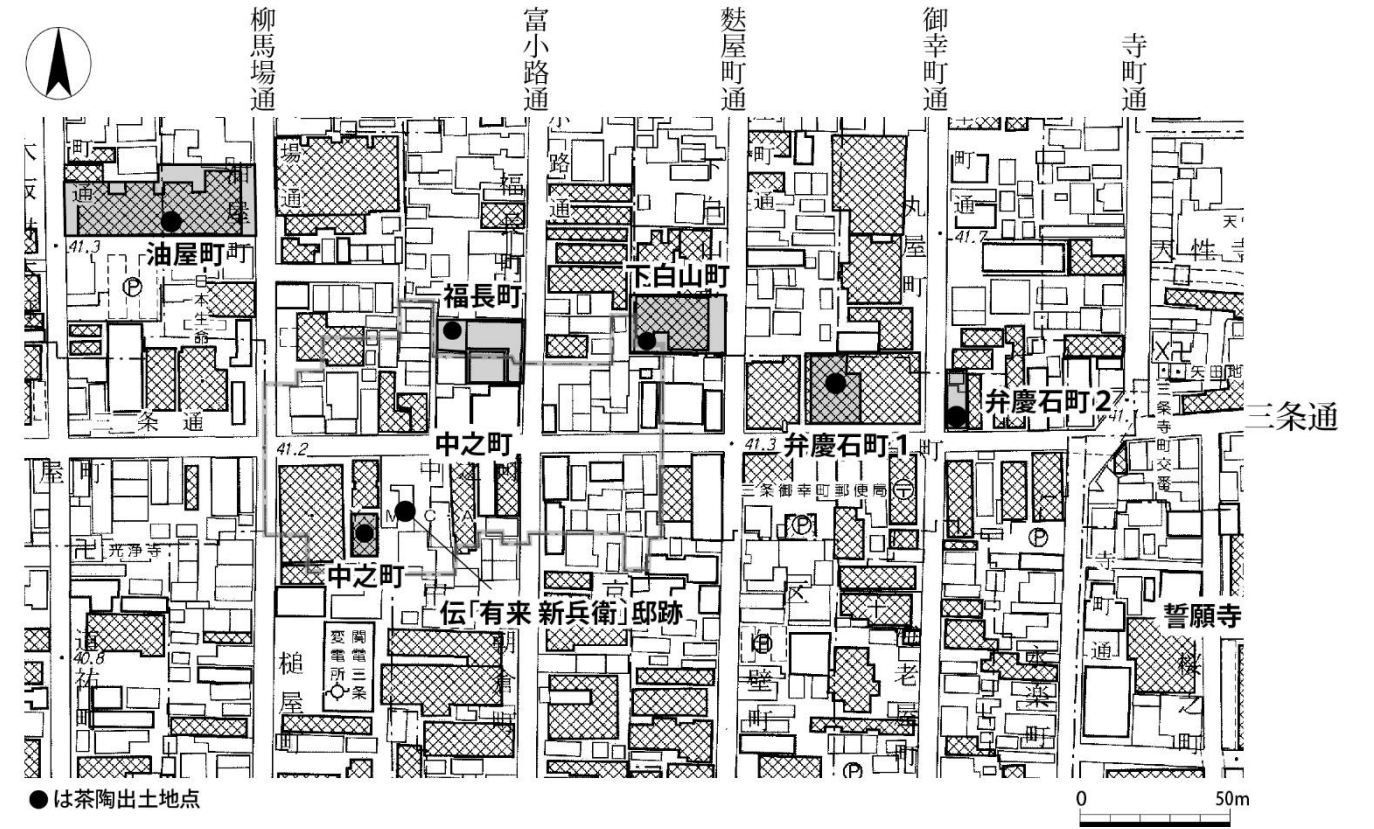


図2 三条せと物や町界隈の桃山茶陶出土地点

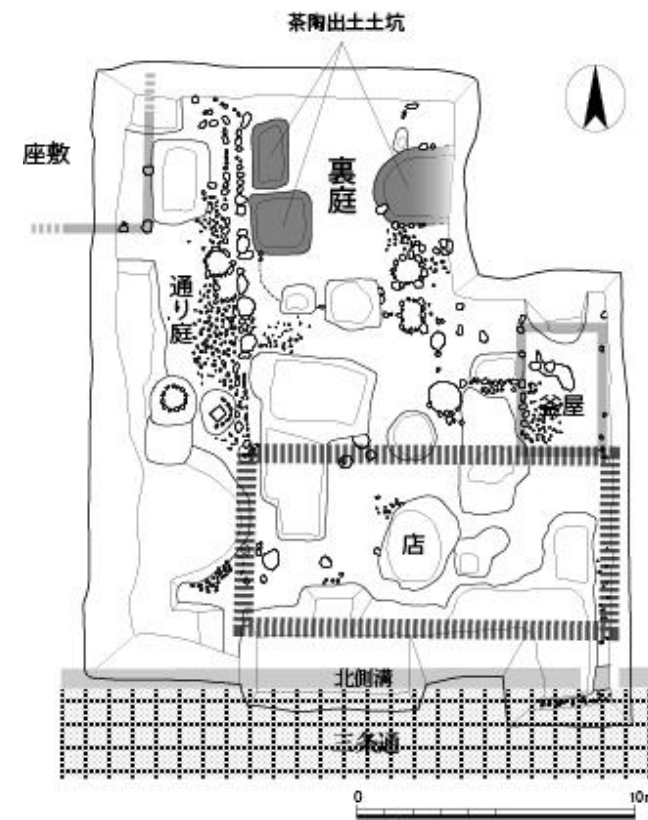


図3 弁慶石町1調査区平面図



図4 弁慶石町1出土品



図5 弁慶石町2出土品



図6 (上) 出土状況・図7 (下) 信楽水指蓋



図11 下白山町出土品



図12・13 多様な造形を示す信楽(上)備前(下)



図8 中之町出土品



図9 (上) 出土状況・図10 (下) 出土した窯道具



図14 福長町出土品

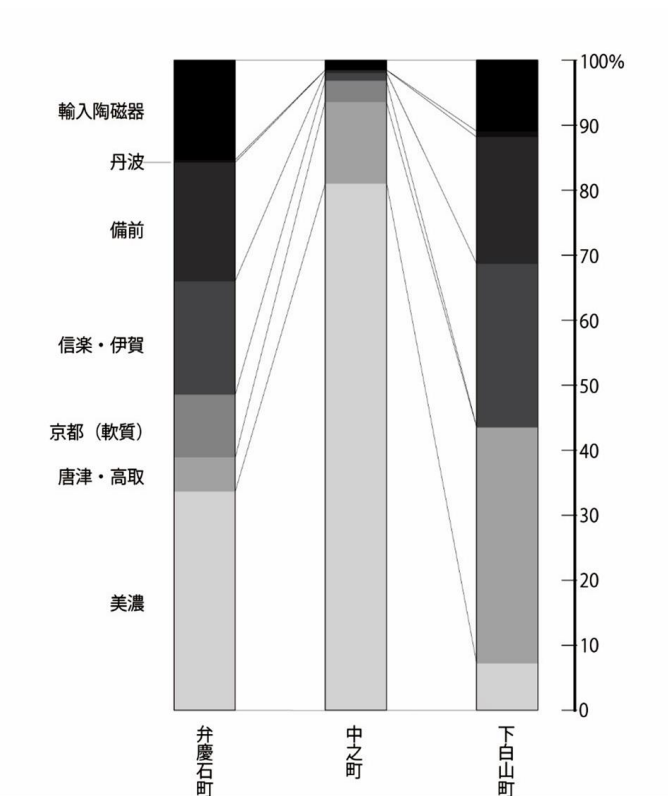


図15 弁慶石町1・中之町・下白山町産地別グラフ